

令和 6 年 5 月 4 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12834

研究課題名（和文）16・17世紀日本におけるイエズス会と修道会との教義論争。その政治的背景を中心に

研究課題名（英文）Doctrinal disputes between Jesuits and Friars in 16th and 17th century Japan.
Focusing on its political background

研究代表者

Marti Oroval Bernat (Marti Oroval, Bernat)

早稲田大学・政治経済学術院・准教授

研究者番号：30802524

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクトでは、16・17世紀に来日した宣教師のうち、イエズス会士と、16世紀末から17世紀初めにフィリピンから来日したスペイン系の托鉢修道会の交流を主題とした。特に、これまでほとんど研究されていなかった、托鉢修道会が既に来日していたイエズス会に対してどのような反応を示し、互いに敵対したのかを研究した。本研究プロジェクトの主な目標は、1626-1627年に東北地方で行われた、イエズス会とフランシスコ会、つまりキリスト教宣教師同士の秘跡および布教の権利を巡る論争を研究することとした。主な成果として、それに関する史料の研究、翻刻、写真、現代語訳および英訳を紹介する研究書を準備した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

イエズス会と托鉢修道会が日本において宣教活動の主導権を巡って争い、論争を繰り広げていたことは広く知られている。しかし本研究では、この両会派の権威争いと密接な関係があったイエズス会と托鉢修道会の間で発生した秘跡を巡る論争に焦点を絞った。禁教令が発布される前のイエズス会と托鉢修道会の論争に関しては先行研究が幾つかあるのに対して、迫害期におけるそれらの論争の研究はほとんどないと言える。本研究では、1626-1627年に東北で行われた堅信討論に着目し、それに関する研究書物の準備を行った。この東北の論争は、恐らくこの一連の論争の最終章である。これを巡る研究はほとんどないため、この分野に貢献したと言える。

研究成果の概要（英文）：This research project focused on the interactions between Jesuits who came to Japan in the 16th and 17th centuries and the Spanish mendicant orders who came to Japan from the Philippines at the end of the 16th century and the beginning of the 17th century. The project particularly examined the largely unexplored topic of how these mendicant orders responded to the already-established Jesuits and how both groups clashed. The main objective of this research project was to study the dispute over sacraments and missionary rights between Jesuits and Franciscans, both Christian missionaries, in the Tohoku region from 1626 to 1627. As a result, I prepared a study introducing the research, transcription, photographs, modern Japanese translation, and English translation of a relevant document related to this topic.

研究分野：宗教思想史

キーワード：イエズス会 托鉢修道会 宗教論争 秘跡 布教権 教義論争

1. 研究開始当初の背景

キリシタン研究は長い歴史を持っているのでさまざまな研究成果が既に出ている。但し、それは主としてイエズス会士の伝道・政治的・貿易活動、または天正の使節、慶長遣欧使節に注目が集まっていた。その中で、もちろん、姉崎正治、海老沢有道、五野井隆史等のキリシタン研究の大家はイエズス会と托鉢修道会との関係に言及しているが、重点的には研究していない。更に、海外の研究者も著しい成果を挙げているが、事実上、彼らの多くは自分の修道会の歴史にしか注目してこなかった。例えば、イエズス会士の Josef Franz Schütte 及び Josef Wicki, フランシスコ会の研究者 Lorenzo Pérez, Cayetano Sánchez, ドミニコ会だと Delgado García, アウグスティヌス会だと Panedas Galindo 等の名が挙げられものの、彼らは自身の修道会のみに着目し、他の修道会との関係・論争についてほとんど研究していない。

従来、イエズス会と托鉢修道会との関係に焦点を当てた学者は僅かであったが、少なくとも岡本良知、Álvarez Taladriz と高瀬弘一郎はそのテーマに関して重要な研究論文を執筆したといえる。そして、近年、この主題に注目する研究者が増加し、高橋裕史、滝澤修身、Carla Tronu、高野友理香、小俣・ラポー・日登美等は、その関係をさまざまな視点から研究している。その中で、高橋裕史は 2019 年に刊行した『戦国日本のキリシタン布教論争』(勉誠出版)は特筆すべきである。しかし、高橋裕史の研究書物を皮切りに以上の学者は当該刊行物で編集する史料、その史料の起源である論争に関する言及が見られない。

その理由の一つは、1614 年以降、すなわちキリシタン迫害期が始まる頃からのイエズス会と托鉢修道会との関係がほとんど研究されてきていないからである。しかし、日本におけるイエズス会と托鉢修道会との関係、論争の全体像を理解するためには先ず、未研究・未出版の史料を調査して公開する必要があると考える。換言すれば、マクロな研究を行う前に、その準備として、ミクロな研究を重ねることが不可欠である。

2. 研究の目的

本研究プロジェクトの主な目標は先ず、既に出版されている史料、先行研究を踏まえ、新たな史料の調査、分析、編集、出版を行い、日本における修道会の伝道活動、イエズス会との関係、彼らが持っていた世界観等に新たな光を当てることであった。具体的には、以下の主題に注目して研究を進めた。

1) 先ず、修道会士とイエズス会士の「宣教理解」、「布教政策」等の相違を分析した。イエズス会の中ではさまざまな議論が行われたが、最終的には「適応主義」という布教方針をとった。すなわち、日本の社会・文化・風習に合わせて宣教活動を行ったのである。一方、後から来た修道会は日本の風習を考慮せず、福音伝道を行ったと、イエズス会士の史料にしばしば批判されている。但し、フランシスコ会等の修道会はイエズス会より宣教活動の歴史はるかに長く、特にイスマノアメリカにおいて布教した際、適応主義に基づいていた活動をしていたので、その背景を念頭に置きながら、修道会が日本での伝道活動を行った際、日本の文化を見下していたということなのか、或いはイエズス会と混同されないように異なったアプローチを試したのか等を再考した。また、イエズス会は先ず日本社会のエリート階層のキリスト教改宗を狙い、そこから日本社会全体をキリスト教化させようとしていたが、修道会は当然ながら当局者とも交流はしたが、貧困層を特に大事にし、その社会階層を狙い、福祉活動を通じて福音伝道を行っていたことを史料に沿って確認した。更に、布教の形態が異なっていたとはいえ、イエズス会・修道会は同じキリスト教的世界観に基づいていたので、異教徒に対する見方の類似点も分析した。

2) 更に、スペイン政府・修道会士はローマ教皇・日本の当局者に対してどのような政治的活動を行ったかを調べた。先ず、1585 年に Ex Pastoralis Officio の教書によってローマ教皇はイエズス会のみ日本での宣教許可を与えたが、それぞれの修道会は連合を組み、スペイン政府と共にローマ教皇に向けてイエズス会を批判しながら、日本での伝道許可を求めた。その結果、1600 年に Onerosa pastoralis officii の教書でイエズス会以外のカトリック教分派にも宣教の許可が与えられることになった。そして、イエズス会・修道会のローマでの政治活動はその後も続き、日本におけるキリスト教迫害が始まると、互いにその責任を追及し、教皇に訴えていた。修道会においては、フランシスコ会のルイス・ソテロ(1574-1624)とドミニコ会のデイエゴ・コリャド(1589-1641)が活発にイエズス会を批判した。両者の関係を示す書簡もそれぞれの修道会の文書館に保存されているので、この問題を更に深く探求するため、彼らの関係をできるだけ明らかにした。更に、その政治的活動の一つ、ルイス・ソテロは慶長遣欧使節を計画し、それに関する史料もスペイン、マドリードにあるフランシスコ会文書館に保存されているので、その調査・研究をしてきた。そして、日本政府(豊臣秀吉)とスペイン政府(フィリピン総督)との外交・貿易、または互いの侵略計画を理解するためにスペイン系の修道会が大いに価値のある報告を書いており、それを研究した。更に、イエズス会は最初からスペインの侵略に反対する立場で、日本政府に修道会の危険性を訴えていたが、両グループにとっては日本の軍事的征服に関する見

解はどこまで異なっていたのかを再考した。

3) 互いの権力争いを背景としてイエズス会とスペイン系の修道会が行った教義論争を研究した。修道会には、日本で布教する権利があるかどうかを始め、布教方法、カトリック教の様々な儀式を行ったり・秘蹟を授けたり資格があるかどうか等の神学書・論争書が多く残っており、そこに焦点を当てた。更に、殉教が始まると共にイエズス会と修道会の摩擦は大きくなり、互いにその迫害の責任をなすりつけ続けた。これらの事情に光を当てるため、未研究の史料を調べた。「宣教」は「殉教」の概念とも密接に絡み合っており、他者を救うために彼らは世界中に派遣され、命をかけていた。現在から見ると、理解し難いかもしれないが、自分の使命である宣教活動を行い、それを行うことによって迫害を受け、命が絶たれることになればそれ自体は神に選ばれ、復活の対象になるという保証となる。したがって、殉教は恐ろしいことでもあるが、同時に喜ぶべきことでもあり、殉教者の存在は他の信者に勇気を与えるものであり、殉教は異教徒の心を動かすための布教活動の一部と理解されていた。しかし、それらの宣教師グループの中で、殉教の概念が多少でも異なっているかどうかを分析した。例えば、フランシスコ修道会士には終末論（つまり、世界の終わりは接近し、神が再び天から降りてくる）は大きい影響を与えていたので、その概念を通して「殉教」を解釈していたのかどうかを研究した。

3. 研究の方法

本研究プロジェクトでは16・17世紀に来日した宣教師の中で、イエズス会士とその後16世紀末・17世紀の初めにフィリピンより来日したスペイン系の托鉢修道会との交流を主題とした。中では、ほとんど研究されていない、それらの托鉢修道会が既に来日していたイエズス会と接してどのような反応を示し、互いに敵対したのかを研究してきた。研究プロジェクトの出発点は2018年8月にマドリッドにあるフランシスコ会の文書館（イベロ・オリエンタル史料コレクション）を一週間訪問した際に発見した非常に興味深く他には見られない史料（AFIO 23-8）である。その内容を簡単にまとめると、1626-1627年に東北地方で行われたイエズス会とフランシスコ会、つまりキリスト教宣教師同士の教義及び布教の権利を巡る論争である。時代的には、まさに日本においてキリスト教が衰退し、本格的な迫害を受けていた時代であり、全ての外国人宣教師の死、追放、背教によって、日本からキリスト教がほとんど姿を消したのは、この直後のことであった。禁教令が発布される前のイエズス会と托鉢修道会の論争に関しては先行研究が幾つかあるのに対して、迫害期におけるそれらの論争の研究はほとんどないと言えるので、当該史料は非常に重要である。

4. 研究成果

本研究プロジェクトの主な目標はその史料を活字化・翻訳・研究すると共に、他の文書館を訪れ、それに関連する他の資料を調査・研究することであった。研究成果としては、以上の研究作業を行い、「AFIO 23-8」史料の研究、翻刻、写真、現代語訳及び英訳を紹介する研究書物を準備してきた。その原稿を刊行するに当たり、JSPS補助金、2022年度研究成果公開促進費（学術図書）（22HP5007）の交付を受け、2023年3月に春秋社より、『日本のキリスト教迫害期における宣教師の「堅信」論争』というタイトルで書籍の形で出版された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Marti-Oroval Bernat, Kiyoshi 島田潔 Shimada, Donas Antonio	4. 巻 6
2. 論文標題 Edicion y traduccion de Escritos jesuitas sobre la confirmacion (1627), compuestos por Francisco Boldrino y compilados por Diego de San Francisco (AF10 23-8)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Mirai. Estudios Japoneses	6. 最初と最後の頁 97~112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5209/mira.80186	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 1件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Bernat MARTI OROVAL
2. 発表標題 1626-1627年の東北地方におけるイエズス会とフランシスコ会の論争
3. 学会等名 東洋大学東洋学研究所、「西洋思想の受容と日本思想の展開 キリシタン時代と明治期以後」研究プロジェクト（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Bernat MARTI OROVAL
2. 発表標題 Los documentos en japonés conservados en el Archivo Franciscano Ibero Oriental (AF10)
3. 学会等名 XV Congreso Nacional y VI Internacional de la Asociación de Estudios Japoneses en España（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Bernat MARTI OROVAL
2. 発表標題 日本のキリスト教迫害期における宣教師の「堅信」論争について
3. 学会等名 第73回キリスト教史学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Bernat MARTI OROVAL
2. 発表標題 The Tohoku dispute between Jesuits and Franciscans on the sacrament of confirmation (Panel: The Rivalry Between Jesuits and Mendicants about the Early Modern Japanese Mission)
3. 学会等名 The Twenty-fourth Asian Studies Conference Japan (ASCJ) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Bernat MARTI OROVAL
2. 発表標題 La disputa entre los misioneros Francesco Boldrino y Diego de San Francisco
3. 学会等名 XXXIV CONGRESO CANELA (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Bernat MARTI OROVAL
2. 発表標題 El hospicio franciscano de San Agustín de las Cuevas (Tlalpan) y la mision japonesa
3. 学会等名 Japon y el mundo hispanico a traves de la ruta transpacifica: siglos xvi y xvii
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Bernat MARTI OROVAL
2. 発表標題 La actividad misionera de Diego de San Francisco y su relacion con la Compania de Jesus
3. 学会等名 XXXIII Congreso Canela
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Bernat MARTI OROVAL
2. 発表標題 El misionero jesuita Francisco Boldrino y sus dos escritos sobre la confirmacion
3. 学会等名 III Jornadas Humanismo Eurasia
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ベルナット・マルティ・オロバル、島田 潔、アントニオ・ドニャス	4. 発行年 2023年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 296
3. 書名 日本のキリスト教迫害期における宣教師の「堅信」論争	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------